年間テーマ
「共に暮らす家を大切に！」

No. 335

ペンテコステ

2017年8月1日発行
（毎月1回1日発行）

谷山カトリック教会
891-0113
鹿児島市東谷山2-33-13
TEL 099-268-2084
FAX 099-284-5738
E-Mail: taniyama-cc@lagoon.ocn.ne.jp URL: http://www5.ocn.ne.jp/~tycc/

発行人： 頭島 光 神父　　編集委員： 太田勇二郎 Sr.下川千穂子 岸誠之助

「私たちが暮らす家は、今！」

「万物はみ言葉によって成った。造られたもので、み言葉によって造られなかったものは何一つなかった。」これはヨハネ福音書の冒頭の言葉です。被造界は決して神によって勝手気ままに造られ、その自己主張のために成ったものではありません。愛されて生み出されたのです。愛だけが人を生かし、愛の力で人は生きるものとされました。神は存在する全てのものを愛して、愛する者のために被造界を授けてくださいました。それゆえ、私たちのために授けて下さったこの被造界は大切に世話すべき愛の対象なのです。

◆ 神は生きておられる

神が造られたこの被造界は生存し続け、かつ成長することを保証されているがゆえに、そこから新たなものが生じさせる力を持っています。言い換えれば、自律した命が宿っているのです。その意味は、この命が明確な目的へと向かって秩序付けられて造られたものだということです。自分自身で自己を形造り、生成し、完成に向かって生き続けるということです。被造界の中でも、特に「人はその人格をもって、明確に一個のアイデンティティを持ち、神との対話に入ることができる存在です」(LS82 参照)。

◆ 究極の充満

宇宙という被造界は、究極、神の充満に至るよう想定されていて、分断されるようなことがあってはなりません。人が自らの力によってこれを引き裂き、神の充満から引き離す時、そこに耐えがたい罪が生じます。神はこの充満をキリストの復活によって成し遂げました。復活の恵みがすべての人を罪から解放したからです。従って、人間はこれらの被造物と共に、究極の充満のなかに向かっていくことになります。こうして、すべての被造界は人間の勝手な意思によって破壊されたり、排斥されたりしてはならないのです。

◆ 神を見る(LS87 参照)

存在するすべてのものは神の美しさを見る。私たち人間は美しい自然をあるがままに見るとき、そこに神の美しさもみることになります。現存するのは神であって、自然そのものではありません。神がいるからこそ、美しい被造界がそこに見えているのです。ですから、私たちはそれらと優しく関わり、より良い相応しい交わり方を模索すべきです。言い換えれば、自然の有効利用というエコロジカルな関係、あり方において、生成し直すことです。

◆ 崇高な交わり（LS89 以下参照)

神は、私たちをこれらの美しい被造界と結びあわせるよう招いておられます。大地が枯れ果て、特定種の命が滅び行くことは、手足が捥ぎ取られるような痛み、悲しみです。壊れやすい大地に優しく手を触れて癒し、滅びそうな小さな命にも愛を注いで復活させることは、私たち愛される者に課させられた究極の使命です。被造界のすべてのものは私たちの仲間であるがゆえに、人に対する優しさと同じく、共感と配慮をもって接せることです。崇高な命と命の交わりがそこに始まるのです。

主任司祭　頭島 光　神父

今月の聖人から

マクシミリアノ・マリア・コルベ司祭殉教者

8月14日

コルベは1894年ポーランドで生まれた。コンヴェンツアル聖フランシスコ会に入会して、1918年司祭となった。ローマに滞在中、同志6人と共に「無原罪の聖母の騎士会」を創立して、聖母に対する信心を広めることを志した。1930年二人の修道士と共に日本に来て、長崎で直ちに「聖母の騎士」を発行した。1936年会議出席のためポーランドへ帰ったが、健康を害して日本に帰ることは出来なかった。

第二次世界大戦が始まり、ドイツ軍がポーランドに侵入した時、彼は逮捕されてアウシュビッツ強制収容所に送られた。ある日、一人の囚人が逃亡したので、所長は10人の囚人を選んで餓死させることにした。選ばれた中の一人に妻子持ちの士官がいた。コルベ神父は身代わりになることを申し出て、さらに死んでいく他の囚人たちを慰め続けたので、所長は神父の態度に我慢が出来ず、炭酸を注射して毒殺してしまった。それは1941年7月のことで、彼は47歳であった。

「わたしが愛に限界をおかないように、私のためにお祈り下さい」

母に宛てた最後の手紙より。

今月の聖人から

ピオ十世教皇

8月21日

「私は貧しく生まれて、貧しく育った。 私は貧しく死にたい」

事実、彼はイタリアのトレヴィゾの近くに住んでいた靴屋で郵便配達夫もしていたサルトの次男であった。小学校を卒業してから、１８５０年パドアの神学校に入った。司祭に叙階されたのは１８５８年で、その後の１７年は小教区の司祭を忠実に勤め、その９年後にはマントヴァの司教に任命された。

教皇に選ばれたのは１９０３年であった。「すべてをキリストにおいて新たにすること」を目指してピオ十世は、２０世紀初頭の混乱した社会を、キリストの精神に従って立て直すため、経験豊かな実践的知力と強靭な意思をもって、さながら「燃ゆる火」のように活躍した。教皇庁の改革と教会法の法典化に乗り出し、また民衆の宗教教育、聖歌と聖務日課の改革など次々と断交した。特に「聖体の教皇」の名にふさわしく、毎日の聖体拝領、７歳以上の子供の聖体拝領を奨励した。

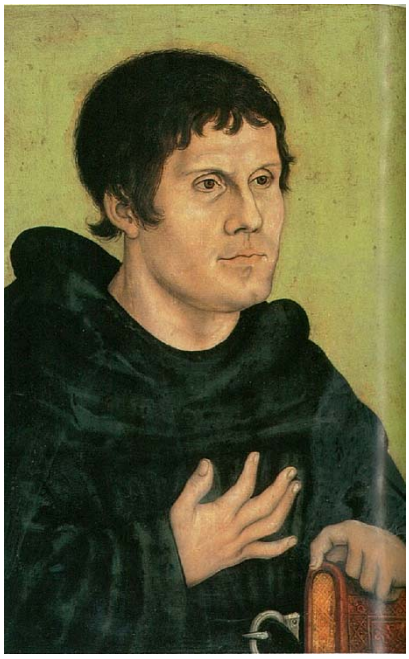
こうして世界中の人々から真理と完徳の灯台のように仰がれたピオ十世は、在位１１年目の１９１４年、第１次世界大戦の勃発にあたり、和平のための努力も実を結ばず、心痛のあまり病を得て亡くなった。

「**聖体拝領は、天国への最も短く、そして最も安全な道ある**」ピオ十世

ムイベルガ神父のアンテナ

ルーテルとヴァチカン

免罪符[i]の販売は、ルーテルの教会に対する批判の切掛けになっていました。 ここで一つはっきりさせておきたいことは、ルーテルは教会の分裂を望んだのではなく、ただ教会が改良と聖書に基づいたものになるようにと願っていました。 この目的を達するための第一歩が95の命題でした。命題によって進められた刷新は、国民、農民、市民やその他多くの住民に賛成されたのですが、ヴァチカンは賛成しませんでした。 ルーテルは繰り返して免罪符の弊害を取り除くように願いました。



しかし、ヴァチカンはルーテルの願いに残念ながら関心がありませんでした。 そして1521年1月3日にローマ法王レオ十世はルーテルを破門[ii]しました。ルーテルに対して好意を持っていた教会の何人かの代表は、ルーテルと積極的な会話に入りたかったのですが、間もなく両者の考えはもう既に固まってしまっていると感じるようになりました。 結局のところ、免罪符の問題はローマの教会に対する直接の抗議になっていきます。 それはどのような結果をもたらしたでしょうか。

ルーテルは信者たちに次のことを教えました。典礼によって皆さんは司祭か司教か教皇です。 この共通の司祭職の教えは、聖職者特に司教たちとローマ教皇との仲介者になる役割に対する攻撃となりました。 しかしそれだけではなく、教会の財産没収や修道会の解散、または主任司祭（牧師）の被選挙権も要求しました。 ルーテルは、刷新された教区の指導者には今までのような司教ではなく、俗界の上司を理想とみていました。 この方式を取り上げた時に彼が忘れていたことは、俗界の王たちや貴族の方々、または政治家が人々の霊性を指導できるかどうかでした。彼らにはそのことに注意を払う資質は無く、自らの権力と経済を第一と考えていました。

---

[i] 免償を与える書状のこと。免償は罪を免ずることではなく、罪に対して課せられた有限な罰の免除を意味するものであるため、正確には「免償符」と訳されるべきもの。サン・ピエトロ大聖堂の修復を目的に免償符が発行されたが、大司教の債務返済のためにも発行されたり、霊魂の救いを金で買わせるような説教が展開されてしまう。

[ii] 破門を意味するラテン語はエクスコムニカティオで、エクスは ～から、コムニカティオは共同体で、この合成語は「信徒としての資格を奪って宗門から除き去ること」の意味で使われる。